

NEWSLETTER

No.9

2003年5月15日

会長 小泉保 事務局 〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町16番1号 関西外国語大学 澤田治美
研究室内 TEL 072-805-2801 (代表) FAX 072-805-2866 E-mail:tanaka@kansai.ac.jp (田中
廣明宛)

URL: <http://www2.justnet.ne.jp/~hiro-tanaka/index.htm>

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

★会員の皆様、お変わりありませんか。日本語用論学会Newsletter第9号をお届けします。さる3月24日に、第18回運営委員会が開かれました。この号は、そこで討議された内容をもとに編集されています。

★第5回大会成功のうちに終了

日本語用論学会第5回大会は2002年12月7日(土)関西外国語大学で開催されました。参加者は177人にのぼり、語用論に対する関心の高さをうかがわせました。

10時から11時40分まで4室にわかれて計16件のワークショップが行われました。各部屋では、和やかなうちにも活発な議論が行われました。

12時30分から1105教室で第5回総会が開かれました。小泉会長の挨拶に続いて、事務局報告、編集委員会報告、会計報告がなされました。

1時から3時30分までA室～D室に別れ、各会場4件、計16件の研究発表が行われました。どの会場も活発な質疑応答がなされました。

3時45分から6時過ぎまで、「語用論から何が提言できるか」(司会:高原修、講師:小泉保、児玉徳美、澤田治美、コメン

テーター:東森勲)と題して、シンポジウムが開催されました。意味論と認知言語学、GCI(一般会話の推意)、法助動詞について、様々な理論を対象としながら、熱気に満ちあふれた充実したシンポジウムとなりました。シンポジウムの内容は今年の『語用論研究』第5号に掲載の予定です。

大会終了後、懇親会が開かれました。終始笑い声の絶えないなごやかな会でした。次回第6回大会(2003年12月6日(土))は、神奈川大学で再会することを約して散会しました。

★第5回大会総括

1. 参加者	177名
現会員	133名
新入会員	15名
当日会員	29名
2. 懇親会参加者	60名
3. 第5回大会運営費内訳	
人件費	161,000円
会議費	67,930円
湯茶費	15,747円
懇親会費	234,725円
合計	479,402円

★2002 年度の会計報告

本学会の会計年度は毎年 3 月末日となっています。昨年度の会計報告は以下の通りです。会計監査委員より監査を受けました。12 月の大会の時に承認していただきます。

2002 年度（平成 14 年度）会計報告

（収入）

前年度繰越金	1,786,803 円
会費（273 口）	1,192,000 円
学会当日会員会費	55,000 円
懇親会費	180,000 円
Program & Abstracts 売り上げ	199,000 円
『語用論研究』バック ナンバー売り上げ	42,000 円
学会補助	94,725 円
雑収入	1,000 円
普通預金利子	167 円
合計	3,550,695 円

（支出）

印刷費	
Program & Abstracts	194,250 円
『語用論研究』第 4 号	228,900 円
学会封筒・プログラム 印刷代	131,930 円
郵送費	120,160 円
事務局諸費（会議費、学会当日諸費用 （雑費、消耗品など）	143,470 円
人件費（学生アルバイト）	161,000 円
講師旅費	0 円
懇親会費	234,725 円
合計	1,214,435 円

次年度繰越金 2,336,260 円

★ 2002 年度予算

（大会が 12 月のため、毎年その年度の予算を大会時に決めております。以下は第 5 回大会で承認されました。）

（収入）

会費（4,000 円×200 口）	800,000 円
当日会費	80,000 円
Program & Abstracts 売り上げ	150,000 円
バックナンバー売り上げ	20,000 円
合計	1,050,000 円

（支出）

印刷費	
Program & Abstracts	160,000 円
語用論研究	230,000 円
郵送費	80,000 円
事務局諸経費	50,000 円
学会当日諸経費（文房具、アルバイト代、 会場費、雑費、シンポジウム講師旅費、懇 親会費補助など）	300,000 円
合計	820,000 円

★ 次回大会開催校・研究発表募集

今年度の第 6 回大会は 2003 年 12 月 6 日（土）、神奈川県横浜市神奈川区六角橋 3-27-1（TEL 045-481-5661（代））

（<http://www.kanagwa-u.ac.jp/index1.html>）で開催される予定です。初めて関東方面での開催となります。奮ってご参加・ご応募下さい。

★ 「研究発表」・「ワークショップ発表」募集

発表要旨：①「研究発表」の場合、A4 の用紙を用いて、余白を十分とり 1 行目にタイトルを明記し、25 字×30 行で

3枚以内にまとめて4部（コピーで可）を提出する。ただし、参考文献表は枚数に含めない（注は付けないこと）。名前は別紙に書くこと。タイトル、名前、所属・職名、住所、電話番号、ファックス番号、電子メールのアドレスを明記したものを添付する。名前には必ずふりがなを付ける。

②「ワークショップ発表」の場合、A4の用紙で、25字×30行で1枚以内にまとめて3部提出する。それ以外の点は①の「研究発表」と同じ。なお、ワークショップの場合、全体のテーマを決めてグループでの発表も歓迎します。

発表時間：①「研究発表」の場合は1人25分以内（別に質疑応答10分）。②「ワークショップ発表」の場合は1人15分以内（別に質疑応答10分）。

応募締切：①「研究発表」の場合は2003年9月1日（月）必着とする（選考結果は1ヶ月以内に通知します）。②「ワークショップ発表」の場合は2002年9月30日（火）必着とする（選考結果は10月中に通知します）（研究発表の締め切りが昨年と違っておりますのでご注意ください（8月31日が日曜日のため））。なお、前日に速達で投函されても地域によっては届かない場合もありますので余裕を持って応募されるようお願いいたします。締め切り厳守。

宛先（問い合わせ）

〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町16-1 関西外国語大学 澤田治美研究室 内 日本語用論学会事務局 TEL072-805-2801（代）FAX072-805-2866。（E-mail: tanaka@kansai.ac.jp（田中廣明宛）ただし、メールでの応募はご遠慮下さ

い）①の場合は「研究発表応募」と、②の場合は「ワークショップ発表応募」と朱筆のこと。

Program & Abstracts の執筆について

研究発表、ワークショップ発表決定者の皆さんについては Program & Abstracts（ハンドアウト集）のハンドアウト執筆をお願いします。研究発表は8枚以内、ワークショップは4枚以内です。締め切りは10月31日（締め切り厳守）です。詳しくは選考結果通知の際にご連絡を差し上げます。

★『語用論研究』第5号投稿募集

現在、本学会の学会誌『語用論研究』第5号への投稿を募集しています。投稿規定は『語用論研究』第4号と学会のホームページに記載されているとおりです。多数のご応募をお待ちしています。以下の要領でご応募下さい。

締め切りは2003年9月1日（月）（研究発表の締め切りと同じ）。枚数と書式：1ページ38文字×32行でA4横書き15枚以内。上・下30mm、左・右25mmの余白をとる。原稿の1ページ目はタイトルのあとに1行アケで氏名の行（ただし、氏名は別紙に書く。投稿の際には書かない）、そのあと2行アケで本文を続ける。例文の前後、各節の前は1行あける。ページ番号は裏面に鉛筆で記す。注は参考文献の前にまとめて付ける。参考文献の書式は、投稿規定を参照のこと。原稿は4部提出（1部は鮮明なもの）。ただし、投稿時には原稿に名前は書かず、別紙に書く。別紙に、氏名（ふりがな）、住所、所属、職名、連絡先電話番号、Fax番号、e-mailアドレスを記入する。

昨年の第4号から掲載決定者には、フロッピーディスクを提出していただくことになりました（応募の際は提出しなくて結構です）。編集委員会では、論文の活字をそろえるため、事務局で版下を作成し、写真印刷に回しています。詳しくは、掲載決定者に後ほどお知らせいたします。

送付先：〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町 16-1 関西外国語大学 澤田治美研究室内 日本語用論学会事務局 TEL 072-805-2801 (代) FAX 072-805-2866。「投稿論文在中」と朱筆のこと。採用決定は9月中。刊行は12月6日の学会で。

研究発表、ワークショップの応募、『語用論研究』の投稿とも、会員に限るという規定がありますので、**会員でない方は応募と同時にご入会下さい**。学会のホームページを参照してください。

(1)他学会との二重投稿はご遠慮下さい。
特に、研究発表、ワークショップは同時期に行われる他学会との二重投稿はご遠慮ください。また、研究発表と『語用論研究』へ同時に同じ内容を応募するのも、お控え願えたらと思います。『語用論研究』への応募は、活字になっていないもので、語用論学会の研究発表やワークショップで発表したもの、あるいは他学会ですでに発表したものなどを歓迎します。

(2)『語用論研究』への応募は、文字数と行数を38文字×32行で15枚以内を厳守してください。また、注や、参考文献の活字を小さくしない。ただし、図表の挿入はかまいません。

(3)『語用論研究』への英文による投稿論文については、1行70ストローク、1ペー

ジ32行を目安に、15枚以内。1行のフォントの大きさを小さくして大量のストローク数になることはお控えください。

(4)研究発表、ワークショップへの応募の要旨と、『語用論研究』への応募原稿は、ご本人と分かるような書き方はできる限り避ける。また、『語用論研究』への応募原稿の段階では、「・・・学会で発表したものである」のような謝辞などは書かないようにお願いします。掲載決定後にはお書きいただいて結構です。

なお、上記の案内は『月刊言語』（7月号）『英語青年』（7月号）『日本語学』（7月号）に掲載の予定です。

★学会費の払い込み

このニューズレターとともに2003年度会費(4,000円)の振替用紙が同封されています。大会当日は納入受付が大変混雑しますので、なるべくこの用紙でお早めに振り込み下さいますようお願いいたします。振替用紙が、2枚入っている方は昨年度分の会費が未納の方ですので、学会の会計をご理解の上併せてお払い下さい。2年連続して会費を未納されますと、会員の資格を失効します。なお、住所・所属に変更や移動のある方は、関西外大・田中廣明宛にメールあるいは郵送でご連絡ください。振り込み用紙の通信欄に書くのはなるべくお控えください（文字がかすれて読めないことがあります）。なお、行き違いがある場合はご容赦下さるようお願いいたします。

★第6回大会のシンポジウム

第6回大会のシンポジウムは伊藤克敏氏（神奈川大学）の司会のもとで、「第2言

語習得語用論—異文化間語用論の視点から—」のテーマで行われる予定です。講師：宇佐見まゆみ（東京外国語大学）「談話研究と語用論—日英語における自然会話と会話教材の比較分析を中心に—」（仮題）、高橋里美（立教大学）「英語学習者の個人差と第二言語語用論」、村田和代（龍谷大学）「ポジティブポライトネスと英語教育」、コメンテーター：西光義弘（神戸大学）の予定です。どうぞご期待下さい。

★ 学会の規約について

日本語用論学会のいっそうの発展とスムーズな運営委を期して、運営委員会では学会の規約の見直しを行いました。3月24日と5月10日の2回の運営委員会で作製した改正案を、12月6日に開かれる第6回大会の総会でおはかりする予定です。

★ 語用論関係の新刊書紹介

- 児玉徳美 (2002) 『意味論の対象と方法』くろしお出版。
- 高原脩・林宅男・林礼子(2002)『プラグマティックスの展開』勁草書房。
- 久保進（編著）・阿部桂子・越智希美子・鈴木光代・向井留美子（共著）(2002) 『発話内行為の意味ネットワーク—言語行為論からの辞書的対話事例分析—』晃洋書房。
- 東森勲・吉村あき子（2003）『関連性理論の新展開—認知とコミュニケーション—英語学モノグラフシリーズ 21.』研究社。
- 加藤重広(2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房。
- Yamada, Masamichi（山田政通）(2003) *The Pragmatics of Negation*. ひつじ書房。

Jaszczolt, K.M. (2002) *Semantics and Pragmatics: Meaning in Language and Discourse*. London: A Pearson Education.

Blakemore, Diane (2002) *Relevance and Linguistic Meaning: The Semantics and Pragmatics of Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.

Lo Castro, Virginia. (2003) *An Introduction to Pragmatics: Social Action for Language Teachers*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.

★ Forum

男性社会と女性社会

西山佑司（慶應義塾大学）

昨年10月から今年の初めまで、CambridgeのDowning CollegeにKeio fellowとして滞在した。ディナーのHigh Tableにも幾度か参加したが、かなりの年配の男性ばかりが、ガウンを着て、怪しげな暗い部屋で、蝋燭だけの光りのなかで食事をする光景は大層異様な雰囲気であった。食事開始の合図である「ゴーン」という銅鑼の音を聞くと一瞬、中世ヨーロッパの世界に連れていかれたような錯覚を起こしてしまう。そんななかで、眼の鋭い fellow からじっとこちらを見つめられると homosexual の世界を垣間見た感じがする。

毎週水曜日はロンドンの University College へ通った。Relevance Theory のセミナーに参加するためである。そこは、あらゆる点で Cambridge と対照的で、モダンで、明るく、informal で、なによりも女性優位の社会であった。英国の二つの異質な社会を体験した3ヵ月間であった。

★ 『語用論研究』第4号の誤植の訂正

『語用論研究』第4号に誤植がありました。お詫びして訂正いたします。

裏表紙：Articles から数えて4行目

(誤) Aqkemi Fu → (正) Akemi Fu

裏表紙の前のページ：執筆者の4行目
(誤) (ぶりじっど まは) → (正)
(ぶりじっど ま一)

(事務局 澤田治美・田中廣明記)

メールでの連絡は、
tanaka@kansai.ac.jp (田中廣明)

へ